

論題	米国の博物館と現代資料
著者	寺崎弘康
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第21号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1995年(平成7年)3月
判型	JIS-B5(182mm × 257mm)

米国の博物館と現代資料

寺崎 弘康

はじめに

一九九四年八月十五日から米国ワシントンDCにおいて博物館や公文書館、議会図書館をたずね現代史資料を調査する機会があった。

二十五日までの十日間でスミソニアン協会(Smithsonian Institution)の博物館・美術館五館と博物館附属のアーカイブズ(註1)(Archives)二箇所、国立公文書館(National Archives)の本館及び分館、米国議会図書館(Library of Congress)三館、海軍関係の博物館二箇所を駆けまわり、さらにバージニア州ノーフォーク市にあるマッカーサー記念館(MacArthur Memorial)にも足を運んだ。この他調査の合間をぬってリンカーン大統領の暗殺で有名なフォード劇場にある展示室や、負傷したリンカーンが担ぎ込まれ息をひきとった民家の展示室なども見学することができた。

右調査の目的は、米国の博物館における現代史展示の状況を実際に見学すること、国立公文書館などに所蔵されている対日戦争や日本占領に関するアメリカ側の資料について所在確認をおこなうこと

であった。後者については、これまで横浜市や茅ヶ崎市で精力的な調査活動がおこなわれており、その内容についても報告がなされている(註2)が、個人では調査がなかなか困難であると多少の不安を感じていた。しかし藤沢市(博物館建設準備担当)の委託をうけた調査団(団長栗田尚弥氏)の人々が、九三年度に続いて再調査のためにワシントンに滞在しており、彼らに同行しながら調査の方法やさまざまな情報をご教示いただくことができた。滞在中、栗田氏をはじめ調査団の植山淳氏(藤沢市博物館建設準備担当)や細井守氏(藤沢市文書館)にはなにかとお世話になった。この紙面を借りてお礼申し上げる次第である。

さて、この調査の結果、写真や地図類、日本爆撃に関する書類などの資料や情報を多数収集でき予想以上の成果をえることができた。と同時に、それぞれの博物館において展示の方法や資料情報の提供の仕方などについても多少なりとも新しい知見を得ることができ、博物館で働く自分にとってこれからの博物館の活動を考えるうえでよい刺激をうけたことも大きな成果である。ワシントンDCを中心にしか見学していないが、いくつかの米国の博物館において現代史に関する展示がどのようにおこなわれているかについて紹介かたがた博物館における現代資料の収集について私見を述べたいと思う。

一 米国博物館の現代史展示

ここでは、I スミソニアン協会の博物館のうち現代史関係の展示がおこなわれている博物館として、航空宇宙博物館、アメリカ歴史博物館、ホロコースト博物館の三館、II ワシントンDC 東南のネイビヤードにある海軍博物館(Navy Museum)と海兵隊博物館(Marine Corps Museum)の二館、III 個人記念博物館であるマッカーサー記念館、について施設と展示内容の概要を述べることにする。

I スミソニアン協会の博物館

航空宇宙博物館はこれまで良く知られているとおりスミソニアン協会の博物館のうち最大の入館者数を誇る人気館である。その展示品のほとんどが実物で、一部は本物と同じ材質で作られた複製品からなるというが、天井から吊るされた大形の航空機や、床からそびえたつ巨大な宇宙ロケットなどの存在感は観客を圧倒するほどの迫力である。さて、展示の構成は、航空機の発展のエリアと宇宙船と宇宙への道のエリアとに分れ、各エリアは一階及び二階にテーマ別の展示室が設けられている。展示室内は実物資料のほかスライドやビデオ、ジオラマなど視聴覚効果を利用した内容となっている。宇宙エリアは多くの宇宙船の実物資料が有効に展示構成されているので素人からマニアまで誰もが楽しめる展示となっており、これが人気を博する理由の一つであろう。また、宇宙への夢だけでなく現

在の地球が抱える自然破壊などの諸問題のこともしっかりと展示として押さえられており、観客に対して問題提起をおこなっている。

一方、飛行機のエリアでは、ライト兄弟以降の飛行機の歴史を実物資料で展開し、とくに戦争と航空機の関連が印象深かった。第二次世界大戦中の航空という展示室の部分は、各国の戦闘機や著名なパイロットの紹介、軍服、戦闘を描いた絵画などで構成されており、日本の「零戦」も展示されている。

さて、航空宇宙博物館の三階には同博物館附属のアーカイブズがあり、一般の入館者は立入れないが、研究調査等の目的であれば事前の予約で訪ねることができる。アーカイブズは世界の航空宇宙に関する総ての文献や書類さらに写真や映画を収集・整理し、「公開」している。ここでは光磁気ディスクに記録されているさまざまな写真をコンピューター検索によって閲覧し、必要な箇所はビデオプリンターでプリントアウトもできた。検索は目録を見て関連資料番号をテンキーで入力するだけで瞬時に画面表示されるシステムで、非常に簡便であることを感じた。目録はキーワードで探せるため、たとえば「Japan」「Air Bombing」「Air Raids」「Yokohama」などで多くの写真が探せた。プリントアウトは一枚五〇セントである。アメリカ歴史博物館は、アメリカの科学と技術、社会と政治、文化と芸術の歴史を三つの階で展示している。ここでは通史的な展示よりもテーマ別の展示が多いため現代史と限定することは難しいが、あえて現代史関係と考える展示室としては、「人工品の世界(Mat-

ial World)」「より完全な結合：日系アメリカ人と合衆国憲法(A More Perfect Union: Japanese Americans and the U.S. Constitution)」を挙げることができる。後者は、第二次世界大戦初頭の数週間に、約十二万人の日系アメリカ人がアメリカ政府によって抑留キャンプに強制収容され、戦争が終了するまで収容所生活が続いた事実を真正面から取上げた展示である。入口には合衆国憲法の条文が象徴的にディスプレイされ、日本人の移民の状況、そして太平洋戦争開始による日系人への迫害の様子を日系人店舗の再現で表現し、つづいて強制収容所内を再現し、これを見降ろす監視台も構築され、当時の雰囲気的空間的に構築している。A・V装置から当時収容された日系人の回想ビデオが流れ、アメリカ人として国家への忠誠心は変わらないのに日系人であるが故に収容された心の痛みを訴えている。このほか第二次大戦中の日系人兵士の活躍、とくに二世たちの国家への忠誠からくる活躍の様子が展示されている。そして最後には、戦争中に日系人がうけた強制収容と財産没収にたいしてレーガン大統領が謝罪し、国家補償を決めた法律への大統領のサインで締めくくられている。このように過去の過ちを真正面から捕らえた展示について、日本の場合と比べてみると国情や国民性の違いによるものかもしれないが、学ぶ点が大きいように思えた。

さて同博物館にもアーカイブズがあったのでアポイントメントなしでいきなり訪問し、受付の女性に要件を伝えるとアーキビストのジョン・フレックナー(John A. Fleckner)が親切に対応してく

れた。私の英会話能力の限界から充分にアーカイブズの状態を聞くことができなかったけれども、アメリカ歴史博物館には学芸員やアーキビスト、修復士などの専門職が約四〇〇人おり、全職員は一六〇〇人を数えるとの話であった。同アーカイブズは、アメリカの歴史に関する写真、映像、文書類を収集し公開しており、訪問した際も日本人とおぼしき人物が美空ひばりの写真をせっせとコピーしているのが見えて、どうして美空ひばりの写真があるのか不思議に思っているが、このアーカイブズの資料収集対象の広さに驚かされた。

ホロコースト記念博物館(Holocaust Memorial Museum)は、スミソニアン協会の博物館の中で最も新しく一九九三年四月に開館した。ホロコースト博物館では前二館とは異なりストロボを使用した撮影が禁止されている。展示室はヨーロッパにおいてナチスの迫害に脅えたユダヤ人の生活を再現した空間構成をとり、アメリカに脱出できた人々と犠牲になった人々の姿をリアルに表現している。展示室を抜けて出てきた所は吹き抜けの空間(Hall of Witness)であるが、ここにも煉瓦と鉄骨、そして無機的に配置された厚い鉄板が配置されており、強制収容所の中にいるような感覚を来館者に与えている。このホールには「追憶の壁」(Wall of Remembrance)と題したタイル画を一千枚ほど貼り込んだ壁展示がある。このタイル画はホロコーストについて思うことをアメリカの子供が描いたもので、子供たちの平和に対するメッセージが壁面からにじみ出ている。アトリウムを挟んで展示室の反対側にはHALL OF REMEM-

BRANCE)がある。ホロコースト博物館はホロコーストの悲劇を永遠に伝えることと、子供たちに平和や人権の尊とさを訴えるものである。

II ネイビーヤード

ネイビーヤードはもともと海軍工廠の跡地であったところに海軍の事務部門を中心とした部署がおかれているという。敷地内には海軍博物館(Navy Museum)、海兵隊博物館(Marine Corps Museum)、図書室などがあり外部者も自由に見学利用が可能で、野外には古い艦船の大砲が配置され、河岸には見学できるフリゲート艦が繫留されている。

海軍博物館は、かまぼこ型兵舎のような大きな建物を利用して作られており、鉄骨の梁や桁などから戦闘機や小型船などが吊り上げられている。入口を入ると右手にミュージアムショップがあり、正面には一九九一年の湾岸戦争の資料が飾られ、左手には米海軍創設期の軍艦の部分がみられ、海軍の歴史を紹介している。海軍の歩みのなかにはペリーの日本来航関係のコーナーがあり、幕府や万延元年遣米使節の献上品の展示もみることができて、こんな所でペリー関係資料があるとはと内心驚いた。

展示室の中ほどからは第二次世界大戦の展示がはじまり、建物全体の約三分の一強のスペースを占めていたようである。まず入口にあたる部分では、一九四一年一月七日の真珠湾攻撃の大パネルが

来館者を迎える。「Air Raids Pearl Harbor. This is no drill.」の有名な言葉が添えられ、太平洋戦争の印象的な始まりを表現している。そして右手は対日戦争の変遷について、左手には対独戦争を展開し、奥へ進むにしたがい戦局の変化を把握できる展示構成をとっている。対日戦争については日本のアジアへの侵略から日米開戦、南太平洋での戦闘、フィリピンやガダルカナルでの戦闘などの局面や作戦にあわせて、航空機・潜水艦や爆弾・大砲など兵器兵力類の展示が立体的に組み合わされている。そのなかで神風特攻機の主翼片や風船爆弾などの実物は強い衝撃をあたえるものであった。また、技法的にも展示ステージを船の形にしたり、写真を実物大に引伸ばすなどの臨場感あふれる巧妙な演出がおこなわれている。しかし、あくまで米国海軍の「正義」と栄光を示すための展示であることを忘れてはいけないが、来館者を引きよせる力があるように感じた。

第二次大戦の展示が終ると、次は戦後の海軍の歩みを武器や兵器を中心に紹介するコーナーで、潜水艦、戦艦、宇宙飛行船などの実物や模型が展示されている。その反対側には、ベトナム戦争のコーナーもある。

つづいて別の建物の中にある海軍図書館を訪れた。入口で入庫表に名前を記入するだけで、書庫内に自由に入り本を手にとってみることができ、簡単な装置であったが所蔵図書のコンピューターによる検索も自由におこなえた。時間の都合でゆっくり見ることができなかったが、明治期に日本で発行されたペリー来航や海軍に係す

る図書も収蔵されていた。

次に海兵隊博物館に向った。栗田氏の話では、海兵隊は海軍の隸下にあるが実際は海軍から独立した存在に近いとのこと、このため海軍博物館とは別に海兵隊独自の博物館があるとのことである。

展示室には、一九九五年が太平洋戦争終結五〇周年にあたることを記念して、プレ展示として太平洋戦争関係の展示が開かれていた。とくに太平洋戦争最大の激戦と言われた硫黄島戦で、激烈な攻防の結果摺鉢山に星条旗を立てたのが海兵隊員であったことから、戦後五〇年記念のシンボルマークに星条旗を立てる五人の海兵隊員の姿が選ばれている。展示の構成は、硫黄島の模型や戦闘状況、部隊の紹介などである。常設展示の方は、時代順にすなわち海兵隊の成立から現在までを三室にて展示している。密林を再現したジオラマには、星条旗と日章旗、カービン銃と三八式歩兵銃が対比しており、戦闘を再現するよりも好敵手に敬意を表したような展示方法に少し戸惑いを感じる。第三展示室は戦争に従軍した兵士が凱旋後に描いたと思われる絵画が展示されてミニギャラリーをかたち作っていた。ミュージアムショップは小さいながらも様々な種類のものを取り扱っていた。

博物館のある建物のなかに海兵隊のアーカイブズがあり多くの資料を保存公開しているとのことであったが、残念ながら訪問しなかった。

Ⅲ マッカーサー記念館

マッカーサー記念館のあるヴァージニア州ノーフォーク市は米海軍の大西洋側最大の軍港があることで有名であるが、米陸軍元帥ダグラス・マッカーサー(Douglas MacArthur General of the Army)の生誕地でもある。その関係で同市がマッカーサーの遺品や資料等を収集し展示するために記念館を建設したのである。マッカーサースクエアというみどり豊かな公園敷地内に記念館、ホール、売店、アーカイブズが建てられている。記念館はマッカーサーの生涯をさまざまな遺品、資料、写真などによって展示するための博物館的な施設である。一階正面玄関を入ると吹き抜けのアトリウムにはマッカーサーの棺が埋められており、その隣には存命している夫人のための棺が並んでいる。その棺を飾るように壁面にウエストポイント士官学校から国連軍指令官に至る軍歴とそれぞれの旗が掲揚されている。展示室はアトリウムの外側を廻るよう一階と二階に置かれ、一階では生誕から第一次大戦にいたる時期を、二階には第二次大戦と日本占領期の資料が展示されている。とくに日本占領期の資料は豊富で、東条英機が自殺未遂したときに使用したピストルや日本国民から送られた書翰や記念品、昭和天皇が贈呈した美術品なども展示されている。マッカーサー記念館はあくまでマッカーサー個人を顕彰する個人史の施設であって、彼の「すばらしき」軍歴と生涯を知らしめることを目的としており、過度なディスプレイは必要とされおらず、ケース内の資料とその説明プレート、そして写真といった

一般的なパターンの展示であった。

続いてアーカイブズを訪問し同館のアーキビストJames W. Zobel氏に調査の目的を告げると快く歓迎してくれた。閲覧室の周囲にはマッカーサーの蔵書が壁面を飾り書齋のような雰囲気をもじられている。栗田氏らは占領期のGHQ文書の閲覧をおこない、私は日本占領期の写真を閲覧した。マッカーサー家のアルバムのほか国防総省などが所蔵する写真を複写し編年に整理されたアルバムを閲覧した。その中から必要な写真の複製を申請し日本での利用許可を求めたところ、同館所蔵および軍関係の所蔵にかかる写真については許可を得れたが、新聞社の所蔵については著作権の問題から許可されなかった。アーキビストの好意にあまえて見学できた収蔵庫は五〇㎡ほどの広さで大まかに分けて文書記録、写真、映像記録、図書の資料が配架されており、きちんと整理されているように思えた。原則的に文書類や写真はマイクロフィルムや複写写真で閲覧させており、請求した資料の出納もスピーディーであった。この資料館でもっとも感銘をうけた点はアーキビストの情報量の豊さである。同記念館が所蔵する資料について知らないことがないと思えるほど、こちらの要求や質問に迅速に対応してくれること、マッカーサーに係る人物についてたとえ日本人であってもよく調査していることに正直いって感動を覚えた。聞くところによると一昨年まではブーン氏というベテランのアーキビストがおり、三〇代後半とおぼしきゾブル氏を指導していたが、昨年後進に道を譲ったとの話である。

その指導によって優秀なアーキビストが育てられたのである。コンピュータによるデータ作成がどこまでできているのか聞かなかつたけれども、見た限りではかなりの部分はアーキビスト個人の記憶にまかされているようである。

以上の博物館や資料館を見学して思った点は大きくわけて次の三つである。

一つは、展示の技法的な面で感心したことは多いが、なかでもグラフィックの有効的な活用について強い興味をもった。展示資料の補強として拡大した写真のパネルなどを利用して、当時のリアルな状況を意図的に創出している点である。たとえば海軍博物館の大胆に拡大した写真や船型に切抜いた写真を用いて展示資料を十分に補完している事例や、アメリカ歴史博物館のなかで街並や特別な状況を立体的に再現するために写真が活用されている事例などがある。これらは近代から現代という時代変化のなかで写真というメディアが持つ写実性の高さや豊かな情報量に着目して、写真を有効利用する一方策として考えなければならぬと思った。しかし、そのためには膨大な写真情報を収集しなければならないし、またその版権についての保護についても充分配慮しなければならない。

二つめは、博物館に付設してアーカイブズが存在し、多くの関連資料の収集と整理、公開がおこなわれ、両者が有機的に結びついていることである。たとえば航空宇宙博物館のアーカイブズではありありとあらゆる航空と宇宙に関する文書、映像、写真、文献などを

収集しており、これら膨大な情報が博物館へも提供されているため、博物館側では展示物の同定や補修などに必要な情報を直ちに受け取ることができ、正確な展示の解説が可能になっている。アーカイブズで収蔵している資料の点数がどのくらいであるか尋ねなかったのは残念なことであった。アメリカ歴史博物館でも同様に博物館内にアーカイブズが存在し、ここは来館者が展示室から直接訪問できることから、来館者のさまざまな疑問を解決しさらなる知的欲求をみたすことが可能な部室となっている。博物館におけるモノの展示に對して、アーカイブズではそれに関わる情報資料を提供しているのである。資料がどのようなもので、類似資料や関連資料はどの文献を見ればよいか、あるいはどこにあるのかなどを調査することができるのである。

三点目は、米国の専門職員がきわめて丁寧に対応してくれた点である。スミソニアン博物館学芸員には会うことができなかったが、航空宇宙、アメリカ歴史の両博物館のアーキビストをはじめマッカーサー記念館のアーキビストしかり、議会図書館のライブラリアンもまた我々の不明瞭であったであろう問合せに貴重な時間をさいて対応してくれ、またこちらが了解するまで何度でも言葉を変えて丁寧に説明してくれた。このような態度はおそらく彼らの専門職であることの誇りすなわち社会的評価による自信からくるものと、そして公共サービスについての明確な自覚が根底にあるものと思う。これを自らの置かれた立場に照らすと実に反省しかつ学ぶべき点が多い

だろう。

二 現代資料の収集とアーカイブズ

ここでは前の項目の中から二に関して、外国所在の現代史資料の収集と公開のありかたについてと、博物館内のアーカイブズについて考えてみたい。

I 外国所在資料の収集

はじめのところでも述べたように今回の米国調査でのもう一つの成果は現代史資料を収集し所在情報を得たことである。米国側の資料についてはこれまでに多くの研究者の調査活動やNHKをはじめとするマスメディアなどによって紹介されている。近年の自治体史の編さん事業でも横浜市や茅ヶ崎市などのように複数年にわたり多額の費用をかけて資料収集をおこない貴重な成果を挙げており、また博物館などの建設にあたっては藤沢市の調査事業をはじめとし、埼玉県平和館の建設などでも貴重な映像記録類を調査収集している。このように多くの機関・組織・個人が現代史資料の調査をおこない、その成果にもとづいたさまざまな現代史像の再構成がおこなわれている状況にある。

しかしこれらの調査は基本的には別々に実施され、その成果が公表されるまでは調査の事情が判明しない。もちろんそれぞれの目的

にしたがい、有能な人材を派遣し多額の費用をかけるのであるから、調査の結果物として有益で価値ある資料の収集という成果が求められるため、どうしても各自治体や組織の制限があるのは仕方ない。

しかし、同じ資料所蔵機関にいくつもの自治体が個々に調査しただけでは、ピンポイント的な調査にならざるをえないというのが実態である。もちろん調査担当者同士の情報交換がなされているが、自治体の枠はなかなか取外すことができないのである。何人か調査をした担当者の話を聞く機会があったが、現地で自治体個別の調査をするにしても結局は他の自治体の分も調査することと同じ手間と時間がかかるとのこと、私も実際に米国立公文書館での調査をおこなった経験から判断すると、調査対象を市町村とした場合と神奈川県域とした場合とでは、ほとんどその労力は変わらない。ただ複製コピーの費用などが圧倒的に多くなるだけである。労力が同じで費用が異なるというならば、市町村や県が協力し分担しながらできないものであろうか。行政的な制約で困難であるとしたら、県内市町村域をカバーすることができうる立場として県がおこなうべきであろう。かつて県史の編さん事業では外国調査を実施できなかったことを顧みると、今年が戦後五十年であることを節目として、アメリカをはじめアジアの国々、南太平洋地域の国々での現代史の資料調査を実施することが責務であるし、これからの文化行政が求められる大きな課題ではないだろうか。このような調査にあたっては、市町村や関連機関とうまく協力分担していく方策を模索する必要がある。

このことは神奈川県史における現代史をどのように構築していくかという問題にもつながるように思える。

ただし、これには収集した資料をどこがどのように整理し、保存し、公開していくかという問題をクリアする必要がある。せっかく協力して収集した資料も共有化する条件を用意しないと結果的に資料の死蔵を招き無駄になってしまう恐れがあるからである。このため資料の内容と所在に関する情報提供するなんらかの窓口が必要であろう。資料は原則的に収集主体がその責任と義務で保管され、公開されるべきである。しかし、大切なのはどこに保管されるかではなく、どこに何が保管されて公開されているかという所在情報が誰もが承知していることである。すなわち資料情報の共有化をどう保証していくかという問題になる。

II 博物館とアーカイブズ

資料情報の問題を博物館としてどのように対応していくかはあくまで私見ではあるが、これまで見てきたように博物館内に資料情報センターとしてのアーカイブズを設置し、情報公開にあたるべきであろうと考える。

では、博物館におけるアーカイブズとはどんなものであるかについて述べよう。まず、博物館とアーカイブズの関係であるが、米国では両者の役割が明確に位置付けられており、それぞれが有機的に連係していると考えられる。見てきた国立の歴史博物館をはじめ個

人記念博物館や軍関係の博物館にもアーカイブズが設置されているのは、博物館とアーカイブズの両者が併存することによって、歴史資料の対象と収集に分担と協力の関係を生じ、結果として多種多用の歴史資料を包括して収集できるからであると考えられる。これを単純に区別することが許されるのならば、博物館では展示のための資料を収集し、アーカイブズでは資料の由緒や性質などの情報が含まれている記録類、写真、映像などを収集するといえるだろう。言葉を換えていうと博物館はモノ資料といわれるようなある種の立体的存在性を対象とし、アーカイブズはモノ資料の形質や特徴、年代などの情報の記録性を対象とすると考えられよう。

ところが日本ではアーカイブズを公文書館ないし文書館と訳しているが、前述の博物館におけるアーカイブズとは異なる内容であるとは私は考えている。公文書館でいうところの「アーカイブズ」は、自治体の作成する歴史的価値を有するであろう公文書の保存と、自治体域における歴史的資料の散逸を防ぐための資料保存が中心である。私はアメリカの事例をもって日本の公文書館制度を批判するつもりは毛頭ない。逆に立場の違いを認識した上でどこで博物館と公文書館とが連係を取り合えるのか模索することが必要であると考えている。

それでは博物館にアーカイブズ的な機能が併置されているところといえば東京国立博物館にある資料館などごく僅かであり、通常は博物館にある図書室やビデオブースといった情報提供コーナーがそ

の役割を担っているのである。その多くは専門書の多い図書室であったり市販のビデオなどを閲覧に供しているだけで、専門的な調査研究ができる場所とは言い難い。博物館はモノ資料も記録資料も同じように収集しているが、学芸員の専門分野の違いによって考古学や美術工芸のようにモノに重点を置く場合と、文献史学のように古文書など記録資料に重点を置く場合とでわかれている。どちらがよいとかいう話ではない。本来モノ資料と記録資料とは資料の性質が異なるのである。しかし、どちらを取扱うにせよその展示資料が持つさまざまな情報を展示する際に抽出するのであり、そのために必要なデータ、図録や参考文献、写真、記録類などの情報資料が必要なのである。これらの多くは学芸員の長年にわたる個人的な蓄積として存在しているだけで、学芸員がいなくなれば展示記録や図録論文などを除けば蓄積の多くは博物館に残らない。これらの重要な情報を学芸員個人だけで利用するのはそれらの情報にとって有効な活用方法とはならないだろう。

そこで博物館内にアーカイブズを設置し、そこに収蔵資料や展示資料に関するさまざまな情報や記録資料を収集整理し、公開などの活用をすべきであると思う。さらに写真や映像はもとより、資料の所在情報などについても同様である。そしてここから県内の博物館や資料館など資料の収集保存利用機関と生きた情報交換をおこない、資料収集、展示活動、調査研究活動、成果の普及還元活動が始まると思う。

おわりに

神奈川県立博物館は、再編整備事業のなかで情報システムの導入をはかり、収蔵資料のデータベース化とその公開をおこない、そのためにミュージアムライブラリーという部屋を用意している。ミュージアムライブラリーでは、この他図書や映像による情報の公開もおこなうが、これまで述べたような資料の所在情報などは基本的に取扱わない見込である。この意味ではまだ県立博物館にはアーカイブズはできていない。しかし私の担当する現代史の分野から少しずつでよいから博物館内にアーカイブズを構築していきたいと夢を抱いている。

わずか十日の米国旅行の小さな見学から大きな問題を述べてしまったが、本文の意図は米国のシステムがよくて日本のが悪いといった立場ではなく、博物館が持つた皆さんの資料と情報をどのようにしたら多くの人々に利用され役にたつのかについて考えただけである。アーカイブズに関する私の理解が一面的の指摘を蒙るかもしれないが、資料と情報を収集し、保存し、公開するという点では博物館も公文書館をはじめ図書館、資料館などと同じ仲間であることはいうまでもない。

註

1 なお、本文において「アーカイブズ」という表現は「写真・映像・文献・書類などの記録資料を収集し保存し、かつ公開する機関」の意味で用いることにしている。

2 『横浜市史研究』『茅ヶ崎市史研究』に詳細な報告がある。